

## 研究ノート

## アダム・スミスにおける視覚と道徳と経済

—堂目卓生著『アダム・スミス』に寄せて—\*

中 澤 信 彦\*\*

## 要 旨

『道徳感情論』と『国富論』において展開されたアダム・スミスの議論を、道徳と経済に関する論理一貫したひとつの思想体系として再構築した堂目卓生氏の近著を手がかりに、そこでの主張と方法を敷衍することを通じて、スミスの穏健で漸進的な改革思想の基盤としての視覚的契機を素描し、併せて、同時代人であるエドモンド・バークの保守思想との親近性を展望する。「『国富論』に道徳的要素を読み込むことは、『国富論』における「経済学の成立」の思想的意義を減ずることにつながる」とする一般的見解に対して、本稿は異議を唱えるものである。

キーワード：アダム・スミス；エドモンド・バーク；『国富論』；『道徳感情論』；視覚；日常  
景観；保守思想；漸進的改革論

経済学文献季報分類番号：01-21；02-11；03-10；03-43；05-21；05-41

## I

この研究ノート（書評論文）が検討対象とする堂目卓生氏の近著『アダム・スミス』（堂目 [2008]）は、「経済学の祖」アダム・スミスの二大著書『道徳感情論』と『国富論』の論理的関係を丹念に読み解いた刮目の書であり、新書で発表されたことが「もったいない」と

---

\* 本稿は経済学史学会関東部会（2009年9月26日、於早稲田大学、テーマ「経済と倫理——経済学史・思想史は何を語りうるのか——」）での配布資料に加筆・修正をほどこしたものである。当日は、第一セッションが佐藤（編）[2009]の合評会（討論者：塩野谷祐一・堂目卓生）に、第二セッションが堂目 [2008]の合評会（討論者：塩野谷祐一・中澤信彦）に充てられた。なお、本研究を推進するにあたり、科学研究費補助金・基盤研究（A）「啓蒙思想と経済学形成の関連を問う——グローバルな視点から——」（2007-9年度、課題番号19203011）の交付を受けた。また、草稿に対して、堂目卓生氏、松本哲人氏から貴重なコメントを賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

\*\* 関西大学経済学部教授 E-MAIL: nakazawa@kansai-u.ac.jp

思われるほどの新鮮かつ本格的なスミス論である<sup>1)</sup>。『道徳感情論』におけるスミスの人間観と社会観を丁寧に考察し、その考察の上に立って『国富論』を読み直すことで、市場主義者・自由放任主義者としてのステレオタイプなスミス像の改訂を目指す。著者（堂目）が新たに提示しようとするのは、人間の真の幸福の所在とその実現を考え続けた熟慮の思想家としてのスミス像である。

本書の構成は以下のようになっている。

## 序章 光と闇の時代

### 第Ⅰ部 『道徳感情論』の世界

#### 第一章 秩序を導く人間本性

#### 第二章 繁栄を導く人間本性

#### 第三章 国際秩序の可能性

### 第Ⅱ部 『国富論』の世界

#### 第四章 『国富論』の概略

#### 第五章 繁栄の一般原理（1）——分業

#### 第六章 繁栄の一般原理（2）——資本蓄積

#### 第七章 現実の歴史と重商主義の経済政策

#### 第八章 今なすべきこと

## 終章 スミスの遺産

評者（中澤）は本務校（関西大学）において、十年余りにわたって、「経済学説史」の講義を担当してきた。そこではアダム・スミスを中心的人物の一人にすえて、とりわけ『道徳感情論』から『国富論』への発展過程を解説しながら、「そもそも経済学とはどのような学問なのか？」という根本問題を受講学生たちと一緒に考えようと努めてきた。そういう意味では、本書の主題は評者にとってすぐれて馴染み深いものなのだが、それにもかかわらず、評者は本書から数多くの新しい知見を引き出すことができた。これまで自分が行ってきた講義に関して、多くの反省材料を与えてもらった。

評者は自分自身の講義で長らく、「アダム・スミスは人間本性を《利己心と同感を具備する》と把握した」と教えてきたのだが、本書が示すように、そこに《賢明さ（賢人＝公平な観察者の判断にしたがう人）と弱さ（弱い人＝世間の評価に影響される人）を具備する》（50-5,

1) 2008年11月、第30回サントリー学芸賞（政治・経済部門）を受賞した。

95 ページ)<sup>2)</sup> という視点を加えるだけで、「(偶然がもたらす道徳判断の) 不規則性」<sup>3)</sup> をこんなにも平易に説明できるとは、たいへん驚かされた。さらに、「不規則性の社会的意味 (意図しない利益)」を論じた 47 ページ以下は、個人の心の自由を保障することの意味を再考させてくれる点において、現代的示唆に富んでいるように思われた。もし有害な行為を意図しただけで、有害な結果をもたらした場合と同じ非難や処罰が与えられる (不規則性が消滅する) のであれば、私たちは自分の心を他人に知られないよう、細心の注意を払って生活しなければならなくなる。不規則性のおかげで私たちの社会はそのような密告社会・監視社会からほど遠い住みやすい社会となっているわけである。

本書の白眉は第三章であろう。『道徳感情論』の丹念な読解から、国と国の間に共通する「公平な観察者」の存在を明るみに出し、その判断にもとづいて国際法 (万民の法) が制定され、国際秩序の形成と維持が可能となる、という新鮮な解釈を提出している。また、それを通じて、スミスの自然法学観および「豊かさの一般原理」へのまなざしを再構成し、『道徳感情論』が『国富論』への道を切り拓いたことを説得的に論証している。

経済学史・思想史研究の現代的意義という点でも、本書は大きな貢献を果たしている。グローバル化、構造改革、規制緩和といった近年の経済的趨勢の功罪を冷静に議論し直すための材料がスミス思想の中に備わっていることを明確に示している。そのことによつて、著者・評者をはじめとする経済学史・思想史研究者が決して古典の訓誥学に終始しているわけでないことが、一般読者にもはっきりと伝わるように思う。著者はこのように述べている。少し長くなるが、引用してみよう。

…スミスにとって、自然的自由の体系を確立することは、社会の秩序と繁栄にとって望ましいことであり、あらゆる社会の為政者がめざすべき理想であった。しかしながら、現実が自然的自由の体系とは異なる状態にあるからといって、急激な改革を行なえば、植民地政策や外交政策における失敗と同様、多くの利害関係者に大きな損失をもたらし、彼らの不満を招くことになるであろう。

2) 以下、特に断り書きがない場合は、堂目 [2008] のページ数を意味する。

3) 「私たちは、行為者の動機が適切で、行為を受ける人に有益な結果をもたらす行為を称賛し、行為者の動機が不適切で、行為を受ける人に有害な結果をもたらす行為を非難する。これが基本原則である」(44 ページ)。しかし、「世間は、意図したにもかかわらず意図したとおりの結果を生まなかった行為に対して、基本原則が示すよりも弱い称賛または非難しか与えない傾向をもち、意図しないにもかかわらず偶発的に有益な、または有害な結果をもたらした行為に対して、基本原則が示すよりも強い称賛または非難を与える傾向をもつ」(47 ページ)。世間は偶然的な結果に影響されて称賛や非難の程度を変える。これが「不規則性」である。

たとえば、政府によって優遇された産業で働く人がいたとしよう。この人は、創意と工夫を用いて勤勉に働いてきたとしよう。今、この産業に対する政府の優遇措置が非効率で不公平なものとして世間から非難され、政府が世間の非難に屈して、それを廃止したとしよう。そして、その結果、この人は、それまでの収入よりも低い収入しか得られなくなったとしよう。この人は、自分の境遇の変化を、どのように受けとめるであろうか。おそらく、この人は、自分は勤勉と創意工夫によって収入を得てきたにもかかわらず、そして優遇されるべき重要な産業で働くことによって社会に貢献してきたにもかかわらず、世間は、収入を不当に得てきた人間として自分を非難し、自分から収入を取り上げたと思うであろう。この人は、非難に値しないと思われる行為に対する世間の非難、処罰に値しないと思われる行為に対する世間の処罰に我慢できないであろう。そして、このような苦境に自分を追い込んだ本当の原因は、優遇政策を導入し、維持し、廃止した政府にあると考えるであろう。この人は、世間に対して怨みを抱くとともに、政府こそが非難され、処罰されなければならないと考えるようになるであろう。このように考える人たちの数が増えて、団結し、政治力をもつようになれば、政府は、それ以上の改革を進めることはできなくなるであろう。政府に対する彼らの非難がさらに高まれば、彼らは、改革とは直接関係ない些細なことで政府を糾弾し、場合によっては暴動を起こすかもしれない。

このように、人びとの感情を無視した急激な改革は挫折し、社会秩序を不安定にする危険性をもつ。したがって、自然的自由の体系に向けた規制の緩和・撤廃は、人びとの感情に配慮しながら「徐々に」進めなければならない。

…改革は、それによって損害を被る人びとの感情に配慮して進められなければならない。どのような個人によっても、決して政府が暴力を用いたと思われてはならない。自然的自由の体系への完全な復帰は「今なすべきこと」ではなく、ゆっくりと、時間をかけて、慎重に行なうべきことであった。スミスは、穏健で現実的な改革論者であった(240-6 ページ)<sup>4)</sup>。

---

4) このような解釈に対応する『国富論』中の叙述を挙げるならば、以下であろう。「外国品の自由な輸入がしばらくのあいだ中絶されたあと、どの程度まで、あるいは、どのようにして、これを再開するのがよいかということが熟慮を要する問題となるのは、特殊の製造業が、それと競合するすべての外国品にたいする高い税または輸入禁止の措置によって、おおいに拡張されて、非常に多数の者がこれに従事するようになった場合である。この場合に人道上必要なことは、自由貿易は徐々に、段階を追って、控えめに、かつ慎重に再開されるべきだということである。もしも、この高い税や輸入禁止がにわかに撤廃されるならば、国産品よりも安価な同種外国品が国内市場に殺到し、たちまちのうちに、幾千の同胞から従来の仕事と生計の手段を奪ってしまうだろう。このことからひき起される混乱は、明らかに重大である」(『国富論』第4編第2章)。

このようなスミスの思考<sup>5)</sup>が、漸進的な改革論に支持を与えるものであっても、スピードとフレキシビリティを重視する「新資本主義」(Sennett [1998]、中澤 [2006])あるいは「新自由主義」(内橋 [2009]、原谷 [2009])の擁護論の対極にあることは、もはや説明するまでもないだろう。

以下では、『道徳感情論』と『国富論』の関係(第Ⅱ節)、スミス思想における視覚の重要性(第Ⅲ節)、視覚と保守的改革論との関係(第Ⅳ節)という3つの論点に即して、若干の論評を行いたい。

## Ⅱ

本書の大きな特徴の一つとして、『道徳感情論』と『国富論』の関係において、前者に置かれた大きなウエイトが指摘できる。著者は「あとがき」で、「[自分のゼミの社会人大学院生である——中澤]川井氏から『道徳感情論』をやさしく解説している本はないかと尋ねられたが、私には思い当たる本はなかった」(287ページ)と述懐しているが<sup>6)</sup>、実際、これまで公刊された数多くのスミス思想解説書(内田 [1961] 第3・4章、大河内 [1979]、高島 [1968]、浜林・鈴木 [1989]、水田 [1997]等)のいずれにおいても、『国富論』の解説に大半のページが割かれており、『道徳感情論』は「露払い」的に軽く触れられる程度であった(田中 [2002]だけ例外的)。『道徳感情論』の比重の大きさは本書の顕著な特徴である。ただし、本書のような『道徳感情論』の考察に基づいて『国富論』を読解しようとする試みそれ自体に対しては、以下のような強力な異論が竹本洋によって提出されている。

『国富論』は『道徳感情論』その他のテキストと連関させて読めばその理解がもっとも深いものになる、というこの[形成史論的——中澤]アプローチのもっともな主張が、もし他の諸著作と連関させて読まなければその十全な理解はえられないということまで

5) 同様の趣旨のより詳細な最近の議論としては、Hont [2005] ch.5がある。

6) 続けて著者は「当時、私は…功利主義…とは異なる経済学の思想的基礎を探求することに関心をもっていた」(287ページ)とも述べている。このような著者の関心は、別の論考で以下のようにいっそう明快に示されている。「主流派経済学は、個人は利己的であり、合理的に計算して自分の利得や効用を最大化するという人間観を基礎にもってきたといえます。最大化に際して、個人はあまり人間関係のことは考えない。…功利主義的人間観が人間を単純化しすぎていることは事実ですが、市場における人間像を厳密に理論化していく第一歩としては、それ以外になかったのではないのでしょうか。…功利主義的な経済学は駄目だった、あるいは利己的経済主体の想定は間違っていたということではなく、市場の振る舞いをよりよく考慮しようとする次の段階においては、利己主義だけではない人間の側面や、市場の不完全性を考慮に入れ理論化するということが求められるでしょう」(堂目 [2009] 170-1 ページ)。

含意されているとしたら、それは『国富論』を独立した著作とみなさないということの意味する。わたしは『国富論』を、『道徳感情論』とは別の、それ独自の理論と思想とヴィジョンとを兼ね備えた書、つまり一書で読みうる著作と見なしているの、他の諸著作の読解が不可欠の前提条件だとは思わない（竹本 [2005] 16ページ）。

『国富論』が「『道徳感情論』とは別の、それ独自の理論と思想とヴィジョン」を有するとは、おそらく、『国富論』によって経済学が道徳哲学から学問的自立をとげたことを含意するのであろうが、それは同時に、経済における道徳的要素の後退こそが経済学の成立にとって決定的であるとの解釈も含意する<sup>7)</sup>。果たして、『国富論』に道徳的要素を読み込むことは、『国富論』における「経済学の成立」の思想史的意義を減ずることにつながってしまうのであろうか？ この問題を考えるためのヒントとして、評者はスミス思想における視覚的契機に着目したい。節を移して議論を続けよう。

### III

本書の類書にない特徴として、スミス思想における視覚的契機の重要性を強く前面に押し出している点あげられる。スミスは「他人を見る / 無視する」「他人から見られる / 無視される」という視覚の問題を非常に重視していた。『道徳感情論』では、再三にわたって、貧者の「無視されること」「同感してもらえないこと」の悲しみが指摘されている。スミスは述べる。

貧乏な人は、…彼の貧困を恥じる。彼は、それが自分を人類の視野の外に置くこと、

---

7) この点に関して塩野谷祐一は次のように論じている。「スミスについて、『道徳感情論』（1759年）と『国富論』（1776年）との関係が問題になることから分るように、彼の経済学が道徳哲学との枠組みの中で構想されていたことは、研究者の間では常識となっている。スミス自身が道徳哲学教授であって、彼は、市場における経済活動は利己心に基づくものであるが、それは公平な観察者の共感<sup>ア</sup>によって是認される限りのものでなければならないと考えた。スミスにおいて、道徳的観点を表す自然法思想が経済学の思考の中にまで入り込んでいるが、『道徳感情論』と『国富論』は別々の本として構想され出版された。そのことに象徴されているように、経済学は独立の学問として道徳哲学から自立したのである。こうして、スミスにおける道徳的要素はその後の経済学の理論構造の中から消滅していった。「倫理によって規制された経済」という観念は、「自立的秩序を持った市場経済」という観念によって置き換えられた。この意味で、スミスは経済的知における大きな屈折点であった」（塩野谷 [2009] 101ページ）。このような見解を踏まえるならば、「経済学の成立」という古典派経済学史・思想史研究の基本的な問題設定それ自体が、「[ビジネスに倫理を?]」というシニカルな懐疑（佐藤 [2009] 4ページ）を本来的に含んでいるように思われるのだ。

あるいは、他の人びとがいくらか自分に注意したとしても、自分が堪え忍んでいる悲惨と困苦について、彼らが、いくらかでも同胞感情をもつことはめったにないということを知っている。彼は〔貧困と無視という——堂目〕双方の理由で無念に思う。無視されることと否認されることとは、まったく別のものごとなのではあるが、それでもなお、無名であることが名誉と他人からの是認という日の光を遮るように、自分が少しも注意を払われていないと感じることは、必然的に人間本性の最も快適な希望をくじき、最も熱心な意欲を喪失させる（『道徳感情論』第1部第3編第2章）。

この『道徳感情論』からの引用の後に、著者の以下のような論評が続く。

自分は世間から無視され、あるいは軽蔑されていると思うことは、人間の希望をくじき、心の平静を乱す。無感覚にならないかぎり、あるいは社会との関係を完全に断ち切らないかぎり、私たちは、自尊心を傷つけながら生きていかなければならない。人間にとって、これほど辛く惨めな状態はないであろう。心の平静を得るためには、最低水準の収入を得て、健康で、負債がなく、良心にやましいところがない生活を送らなければならない。しかし、それ以上の財産の追加は幸福を大きく増進させるものではない。以上がスミスの幸福論である（82ページ）。

評者はこの著者の見解に全面的な賛意を表明する<sup>8)</sup>。しかし、第Ⅱ節での議論にも関係することだが、「『道徳感情論』から『国富論』へと至る過程で視覚的契機は後退したのか否か、それをどう評価すべきか」という問題が、論じられないまま残されてしまったように思われる。堂目〔2007〕において、視覚の問題は扱われておらず、堂目〔2009〕では、両著作における視覚的契機の差異（『国富論』における後退）——それは堂目〔2008〕で強調されてい

---

8) このようなスミスの視覚重視的な道徳論を現代経済の諸問題に応用しようとすればどうなるだろうか？「経済を発展させるのは「弱い」人」（85ページ）であり、「私たちは、自分の中にある虚栄心——自分を本当の値うち以上に見せようとする心——を完全に拭い去ることができない」（95ページ）のだとすれば、私たちは企業経営者の「弱さ」や「虚栄心」を批判するのではなく、それらをありのままに認めることからすべての議論を始めるべきであろう。この場合、大切なのは、その企業の活動が「フェアプレー」の条件を満たしていることである。それゆえ、企業を観察する第三者の存在が決定的に重要になるだろうし、観察者が事情に精通するために、ディスクロージャー（情報開示）が大きな意味を帯びるだろう。また、企業ではなく労働者の側にとっても、自分が仕事を通じて他者と結んでいる幸福な人間関係——それを実感させてくれる身近な他者との「見る / 見られる」関係——が、働くことの意味の醸成にとってきわめて重要となるだろう。こうした問題に関する評者の試論として、中澤〔2009b〕がある。

い——が、以下のようにはっきりと述べられている。

『道徳感情論』では、スミスは、顔の見える世界（日常生活）の中で、私たちがいかに正義感を養っていくかを描いたのに対して、『国富論』では、顔の见えないより大きな世界、つまり分業社会において、どこの誰が作ったか分からないものを売買する世界を描いたといえます。問題は、私たちは顔の见えない世界の中でも、あたかも顔の見える相手と取引をしているかのようにふるまえるか否かです（堂目 [2009] 173ページ）。

堂目 [2008] は、投資の安全性をめぐる議論（198ページ）を除けば、『国富論』における視覚的契機をさほど強調していない。他方、対照的に、『国富論』が『道徳感情論』とは別の、それ独自の理論と思想とヴィジョン」を有するとした竹本洋は、『国富論』における視覚的契機を、投資の安全性ばかりでなく、分業の両義性、適正規模の組織など、様々な観点から詳細に分析している（竹本 [2005] 130-45ページ）。果たして、『道徳感情論』から『国富論』へと至る過程で視覚的契機は後退したのか？ 『国富論』における視覚的契機をどう評価すればよいのか？ それは『道徳感情論』の残滓にすぎないのか？あるいは、スミス思想にとっての本質的契機として考えられるべきなのか？

評者の見解では、スミスにとって、顔の见えない世界をいかにして可視化するのかという問題こそが、市場経済の安定化にとって本質的な問題であったように思われる。具体的で見えるものこそが確かなものであり、抽象的で見えないものは不確かなものである。顔の見える関係こそが社会（≒大衆の感情）の安定のための確かな土台たりうる。スミスはそう考えていたように評者には思われるのだ。だからこそ、スミスは、『国富論』公刊後の『道徳感情論』第6版（1790）において、現実の人々の感情を考慮することなく自分の掲げる理想の美しさに陶醉して急激な社会改革を進めようとする統治者を「体系の人」（242ページ）と呼んで批判したのではなかったか<sup>9)</sup>。スミスにとって、「社会の安定」という論点を介して、道徳と経済は不可分であったし、両者の不可分な関係を考える上で、視覚は本質的な役割を果たしていたように思われる。第I節で言及した漸進的改革論者としてのスミス像は、むしろこの脈絡から理解されるべきものであろう。

したがって、堂目 [2008] が『国富論』における視覚的契機をあまり強調していないこと

---

9) Hont [2005] ch.5. 隣国フランスでは、大革命前夜の1770・80年代に動物磁気催眠術（メスメリズム）が大流行した。流体という「見えないもの」に対して大衆は熱狂した（Darnton [1968]）。モンゴルフィエ兄弟による熱気球の飛行実験の成功（1783）がアメリカ独立と並ぶ歴史的偉業として賞賛されたのも、同じ脈絡で理解されるべきであろう。



は、評者にとって不満である。評者としては、「『道徳感情論』から『国富論』へと至る過程で視覚的契機は後退したのか否か、それをどう評価すべきか」という問題に対して、「視覚的契機は後退しておらず」、「『道徳感情論』も『国富論』も視覚的契機を重視した著作として読まれるべき」であり、そのように読まれることによって「スミス思想における視覚と道徳と経済との間の密接な関係が理解可能となる」との解答を与えたい。

もっとも、「後退していない」が「そのまま継承されている」を意味するわけでない。視覚的契機を重視する際の力点の変化も指摘できる。『道徳感情論』においては、自分が社会の中でどのように見えるかを自らの胸中の「公平な観察者」の概念を通して相対化していく「視覚の社会化」(生越 [1999])に力点が置かれているのに対して、『国富論』においては、社会の安定化の基盤としての可視性・可視化の重要性が力説されているように思われる。

次節では、日常景観の保全という具体的問題に即しながら、可視性・可視化と漸進的改革論との結び付きについて考察することによって、スミス思想における視覚と道徳と経済との間の密接な関係を展望することにしよう。

#### IV

評者はエドモンド・バークに代表される西洋保守思想を(経済学史・思想史との関わりで)かれこれ十数年にわたって研究してきた。去る2009年2月にその研究成果を一書にまとめたわけだが(中澤 [2009a])、そこでは保守思想の政策的な次元での核が「漸進的改革論」に存することの論証に多くの紙幅を割いたため、保守思想の哲学・理論的な次元での核としての「慣れ親しんだものへの愛着」については、詳細な議論を展開する余裕がほとんどなかった。そこで展開できなかった議論をここで補足的に展開させてもらうならば、評者としては、可視性と保守思想の間には密接な関係があると考えている。保守思想の哲学・理論的な次元での核は「慣れ親しんだものへの愛着」であり、とりわけ、そこでは可視性が重要な役割を果たしている。その事実「慣れ親しんだもの」としての日常景観の保全という具体的問題において典型的に現れる。

保守思想は産業主義・開発主義に対して批判的・懐疑的なスタンスをとる。日常景観問題と地球環境問題は、どちらも行き過ぎた経済振興が招いた負の帰結ではあるが、人間の視覚の物理的有限性という観点に照らすと、根本的に別種の問題であると言える。姫路城や鴨川河川敷の景観は私(評者)という人間の個性(人生の物語)と不可分であるけれども<sup>10)</sup>、海面

10) 評者は兵庫県姫路市の出身であり、現在、京都市左京区に在住している。

水位上昇によってモルディブが水没するという問題はさほど不可分と言えない。後者を私が人生の問題として受け入れるためには、必ずしも視覚の次元ではとらえられない媒介項(具体的には国家・国際社会など)を想像力の助けを借りて動員する必要がある。後者は前者ほど「自然」「あたりまえ」に受け入れられる問題ではない<sup>11)</sup>。少なくとも私にとっては、自分の人格(人生の物語)が本源的な危機に晒されている、という切迫感の度が相当に違うのである。

このような日常景観に関する半ば本能的な感覚を評者が客観視・対象化できるようになったきっかけは、日常景観の保全をめぐる松原隆一郎の議論である。

松原は、『失われた景観』(松原 [2002])において、日常景観の保全をめぐる問題群を包括的に採りあげて議論した。『失われた景観』は、戦後日本における日常景観の荒廃について、4つの事例——郊外ロードサイド・ショップ(第1章)、神戸市(第2章)、神奈川県真鶴町(第3章)、電線地中化問題(第4章)——を取り上げて、社会経済学の観点から考察している。松原は、開発優先の土地利用に抗して日常景観を守る理論的根拠として、K・ポランニーの土地商品化フィクション説やJ・ロックの所有権思想などを援用しつつ、「日常景観とはそこに住む人々の人格・個性の一部であり、彼らの生の豊かさを根本から規定している以上、時間的・空間的連続性が何より尊重されねばならない」と主張する。松原は、1995年の震災で大きな被害を受けた神戸市の出身であり、震災によって慣れ親しんだ日常景観を失った神戸市民の心情に寄り添おうとする。そして、復興の旗印のもとに市民が慣れ親しんだ日常景観を復興させなかった神戸市の方針に対して、憤りを隠さない。松原によれば、

一律に旧家の建て替えが悪いとは言いがたい。けれども、消失することにより町の印象が一変してしまう、「臍<sup>へそ</sup>」のような家屋が存在するのも事実なのである。そうした家が何の前触れもなく消え去ると、過去との時間の連続が切れたように感じてしまうのだ(松原 [2002] 16ページ)。

11) 「注意すべきことは、祖国への愛は、慣行的同感から直接導かれる愛着ではないということである。私たちは、祖国の人びとのすべてとつき合い、同感し合うことはできない。また、国自体と同感し合うこともできない。要するに、祖国への愛は、家族や友人などと違って、自分にとって実体のないもの、直接に同感し合うことができないものに対する愛着、つまり仮想的な愛着であるといえる」(125ページ)。他方、故郷の慣れ親しんだ景観への愛着は、慣行的で視覚的な基礎を有するがゆえに、実体的な愛着だと言えそうである。ただし、「弱い人」は「目に見える」ものに影響されやすいから、「目に見える」ことがかえって「錯視」を引き起こす危険性もある。スミスはこのような可視性の負の側面への考察も忘れない。その代表例として貨幣錯覚(貨幣を富と思いこむという錯覚)が批判的に論じられる(174ページ)。

…景観は歴史性と全体性を秘めるものであるため、安易に作り替えれば住民の「原風景」を崩壊せしめ、しかも急速な「変景」は歴史に断絶をもたらして、人間の適応能力を超えてしまう… (松原 [2002] 75ページ)。

我々はある人の人格について語るとき、その人の「内面的な性格や人柄だけでなく、何を食べて何を着るか、どういう家にどういう家族と住んでいるか、どのような蓄財があるか、どういう人々と交流しているか、どういう仕事をなしたか、とといったいわば外的な財にまで言い及ぶ」…。つまり、一定の個性ある景観は、ある人の人格と不可分であるはずなのだ (松原 [2002] 129ページ)。

保守思想が国家 (あるいはナショナリズム、愛国心) と一直線に結び付けられることに対して、昔から評者が小さくない違和感を覚えていたのは、どうも以上のような理由が隠されていたようなのだ。松原はイギリスのチャールズ皇太子の見解を紹介しながら、「建築物と景観において表象される保守的精神の重要性」(松原 [2002] 146ページ) を説き、パークの保守思想との関連にまで言い及ぶ——松原は指摘していないが、パーク自身、「私は、補修を加える場合にも可能な限り旧来の建物の形に似せて行いたい」(『フランス革命の省察』) と述べている——のだが、この叙述こそまさしく評者の保守思想研究の哲学的・理論的基礎を代弁してくれるものであった。

真の改革とは保守的な漸進的改革である。(実業家・大原孫三郎によって設立された) 倉敷中央病院の建て替えは、このことを端的に示す事例である。

孫三郎が拓いたカルチャーの凄いところは、それが一代限りではなく、その後の時代を一貫して引き継がれ、しかも考え方が大原社会問題研究所から倉敷中央病院に至るまであらゆる分野に及び、かつ一貫していたことでしょう。私もその倉敷中央病院について、1978年のころ取材し、やはり『匠の時代』シリーズで書いたことがあります。「倉敷物語」と題しまして、その1つの章を「病院の赤い屋根」ということにしたんです。というのも病院の建物をめぐってさえ驚いたことがたくさんあったからなんですね。

現在の地上10階建ての病院の屋上に、レンガ色した赤い帽子が乗っかっていますが、まるで天守閣のように見えるその屋根の赤い瓦は、大正12年(1923)にできた旧棟の屋根瓦を一枚一枚、ていねいにはがして、それを新しい病棟の屋根に移し替えて、また一枚一枚張りつけていったものだというのです。なぜ、そんな手間のかかることをしたのか、たとえば、長い時間、倉敷市民の心に根づいた「緑の中の赤い屋根」の原風景を、病院を建て替えた後も消さずに生かし続けたい、と倉敷市民も患者も医師も、そして病院経

営者も望んだからです。1973年、つまり旧倉敷病院が生まれて50年後に、孫三郎の子息、大原総一郎氏が決断して新病院の起工式が行われています。

私が訪ねたころ、真新しい10階建ての建物の屋上ばかりでなく、壁面にも張りつけられた赤い瓦の上に、緑の蔦が一面、柔らかな葉を茂らせていました。病院の設立から当時で57年と聞きましたが、孫三郎の築いたカルチャーがたしかに生きてるなあ、そう実感させられたものです（城山・内橋 [2004] 101-2ページ<sup>12)</sup>）。

このような改革こそ、バークのみならずスミスも求めた改革であったはずである<sup>13)</sup>。保守的な漸進的改革論者としてのスミス像は、スミス思想における視覚的契機に——「視覚の社会化」のみならず「可視性・可視化」の重要性にも——着目することによって、いっそう明確に理解できるのである。

『国富論』に道徳的要素を読み込むことは、『国富論』における「経済学の成立」の思想的意義を減ずることにつながってしまうのであろうか？ いや、断じてそうではあるまい。スミスの漸進的改革論のヴィジョンは道徳的要素を抜きにして理解可能なものではないだろう。

#### 参考文献一覧（スミスとバークの著作は割愛した）

- Darnton, Robert [1968] *Mesmerism and the End of the Enlightenment in France*, Harvard U. P. 稲生永訳『パリのメスマー——大革命と動物磁気催眠術——』平凡社、1987年。
- Hont, Istvan [2005] *Jealousy of Trade*, Harvard U. P. 田中秀夫監訳『貿易の嫉妬』昭和堂、2009年。
- Sennett, Richard [1998] *The Corrosion of Character: The Personal Consequences of Work in the New Capitalism*, W. W. Norton. 斎藤秀正訳『それでも新資本主義についてゆくか——アメリカ型経営と個人の衝突——』ダイヤモンド社、1999年。
- 内田義彦 [1961] 『経済学史講義』未來社。
- 内橋克人 [2009] 『新版 悪夢のサイクル——ネオリベリズム循環——』文春文庫（オリジナルは2006年刊）。
- 大河内一男 [1979] 『アダム・スミス』講談社。
- 生越利昭 [1999] 「視覚の社会化——「観察者」視点の生成と変容——」、大林信治・山中浩司（編）『視覚と近代——観察空間の形成と変容——』名古屋大学出版会、第4章。
- 佐藤方宣（編）[2009] 『ビジネス倫理の論じ方』ナカニシヤ出版。

12) 大原孫三郎の生涯を描いた城山三郎の小説『わしの眼は十年先が見える』（城山 [1994]）に話題が及んだ際の、内橋克人の発言。なお、倉敷中央病院の写真は <http://www.kchnet.or.jp/album01.asp> にある。

13) 毛利健三はスミスの思想の中に柔軟な現実主義を見る反面、バークの思想の中に硬直した市場主義を見て、両者の相違を際立たせようとする（毛利 [2008] 第1章）が、評者はこのような解釈に同意できない。中澤 [2009a] 第9章を参照されたい。

- 佐藤方宣 [2009] 「倫理はなぜ/いかにビジネスの問題になるのか」、佐藤（編）[2009] 序章。
- 塩野谷祐一 [2009] 「経済を存在論的に「投企」する」、『現代思想』青土社、2009年8月号（vol.37-10）。
- 城山三郎 [1994] 『わしの眼は十年先が見える——大原孫三郎の生涯——』新潮文庫（オリジナルは1991年刊）。
- 城山三郎・内橋克人 [2004] 『「人間復興」の経済を目指して』朝日文庫（オリジナルは2002年刊）。
- 高島善哉 [1968] 『アダム・スミス』岩波新書。
- 竹本洋 [2005] 『『国富論』を読む——ヴィジョンと現実——』名古屋大学出版会。
- 田中秀夫 [2002] 『原点探訪 アダム・スミスの足跡』法律文化社。
- 堂目卓生 [2007] 「アダム・スミス『国富論』」、日本経済新聞社編『経済学 名著と現代』日本経済新聞出版社、第11章。
- 堂目卓生 [2008] 『アダム・スミス——『道徳感情論』と『国富論』の世界——』中公新書。
- 堂目卓生 [2009] 「経済学の可能性とアダム・スミスの復活」、『現代思想』青土社、2009年8月号（vol.37-10）。
- 中澤信彦 [2006] 「働きすぎの時代を超えて」、ビジネス・エシックス研究班『ビジネス・エシックスの諸相と課題』（関西大学経済・政治研究所研究双書第142冊）、補章。
- 中澤信彦 [2009a] 『イギリス保守主義の政治経済学——バークとマルサス——』ミネルヴァ書房。
- 中澤信彦 [2009b] 「組織と仕事——誰のために働くのか——」、佐藤（編）[2009] 第3章。
- 浜林正夫・鈴木亮 [1989] 『アダム・スミス』清水書院。
- 原谷直樹 [2009] 「新自由主義（ネオリベラリズム）」、佐伯啓思・柴山桂太（編）『現代社会論のキーワード——冷戦後世界を読み解く——』ナカニシヤ出版、第1章。
- 松原隆一郎 [2002] 『失われた景観——戦後日本が築いたもの——』PHP新書。
- 水田洋 [1997] 『アダム・スミス——自由主義とは何か——』講談社学術文庫。
- 毛利健三 [2008] 『古典経済学の地平——理論・時代・背景——』ミネルヴァ書房。